

広野八郎・記

華氏140度の船底から^(下)

外国航路の下級船員日記

マドロス哀史



太平出版社

術家連盟」「労農文化連盟」「労農文学同盟」に所属して詩・小説などを発表。その後、土木労務者、火夫をへて炭坑夫になり、敗戦を三池宮浦坑でむかえる。敗戦後も再び炭坑にもどり、1962年まで25年間の坑内生活をおくる。『葉山嘉樹回想』(仮題)を近刊(太平出版社)の予定。

華氏140度の船底から(下)

1979年3月20日 第1刷発行

¥1300

著者	広野 八郎
発行者	東京都千代田区神田神保町1-46 崔 容 徳
印刷者	東京都文京区後楽 2-11-2 道野整版所

発行所 東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル

株式会社 太平出版社 ©

電話 03-295-3531(代表) 振替東京1-99563

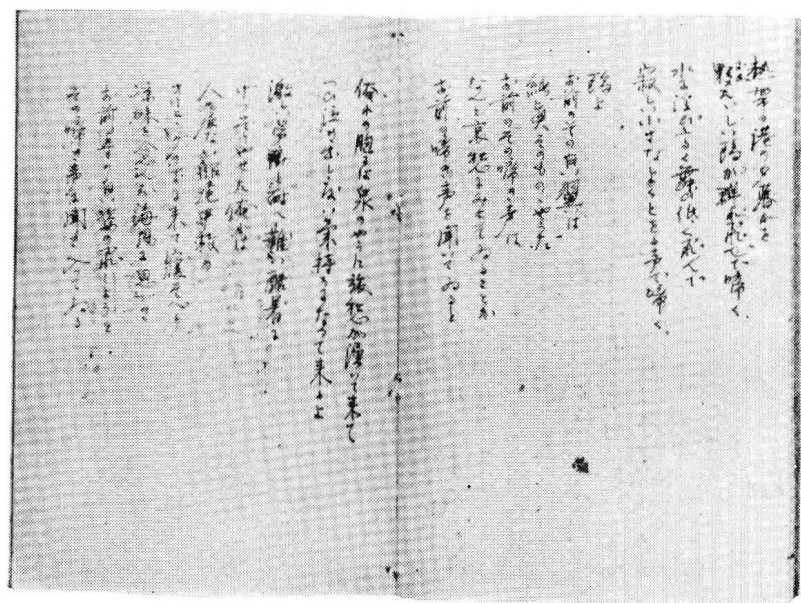
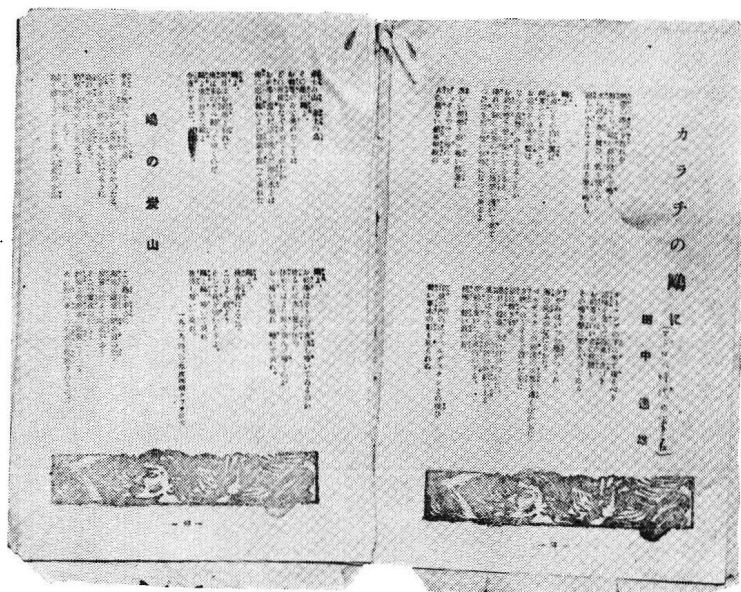
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

広野八郎・記

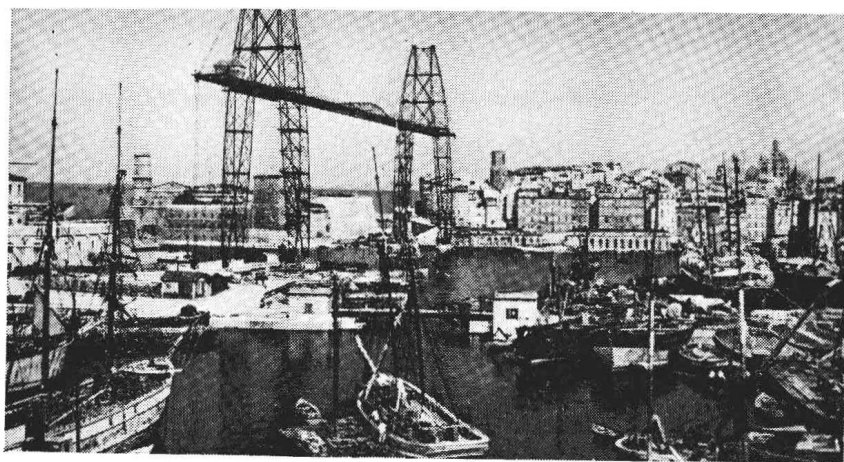
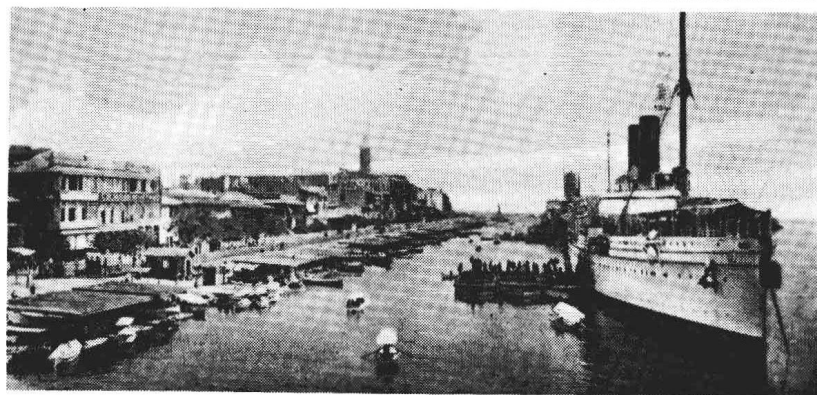
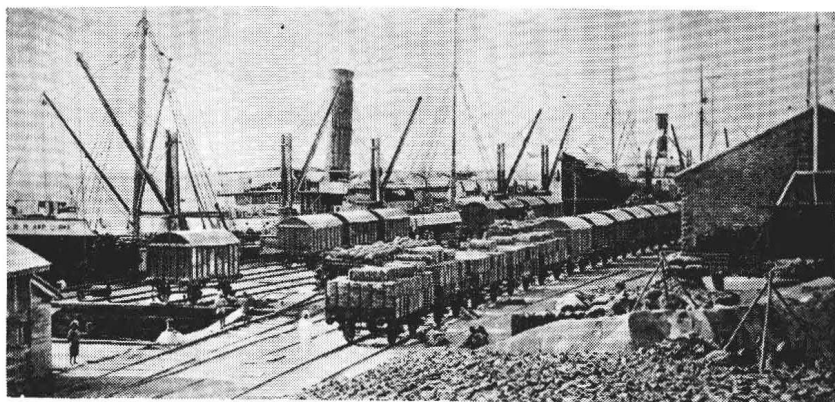
華氏140度の船底から 下

外国航路の下級船員日記

太平出版社



上 「文芸戦線」1930年11月号に掲載された広野さん（筆名 田中逸雄）の詩（下巻138ページ参照） 下 上の詩が書きつけられた日記原文（上巻92ページ参照）



当時の香取丸の寄港地風景（上 カラチ 中 ポートサイド 下 マルセイユ）

華氏一四〇度の船底から(下)

広野 八郎 記

— 外国航路の下級船員日記

V	下級船員の血と汗で走る石炭船——一九三〇(昭和五)年四～六月……………	11
VI	火夫長の横暴と搾取——一九三〇(昭和五)年七～九月……………	57
VII	甲板をおそう暗い時代の波しぶき——一九三〇(昭和五)年一〇～一二月……………	103
VIII	激浪つづく三年めの船員生活——一九三一(昭和六)年一～二月……………	153
IX	苦難と黒煙にかすむ長い航跡——一九三一(昭和六)年三～六月……………	191
	あとがき……………	231
	解説「広野日記」と戦前海上労働史……………『繫留索』主宰者 中原 厚	232

V 下級船員の血と汗で走る石炭船——一九三〇（昭和五）年四月六日

一九三〇（昭和五）年四月二三日

四月一七日コロンボを出港してから、きよう午後五時ごろ、アデン（現在のイエメン民主人民共和国の首都）着。同夜一〇時、出帆。

みわたすかぎり、草木の緑とは一点もない、白く赤くざらざらと太陽に輝くはげっぱの岩山が、巨人の斧で切りおろしたような断面をみせてそびえている。岩石の山、砂漠の谷、それが疊嶂（じようしやう）としてつづき、まぶしく炎（い）えている。

アデンは、港としての設備もなかった。岩山が急傾斜をなして海におちこんでいた。そこに小さな建物（たけ）が二、三、おなじ岩山の色をして建っているだけであった。海水は濃藍の毒どくしさで、草木のない陸（おか）の黄赤色と対照して、いかにも熱帯らしい印象をあたえた。この岩山のむこうに、かなり大きい都市があるということである。

暑い、暑い。ながい熱帯の航海に、やせてつかれて、精神も肉体ともに消沈（しょうしん）して、生きた心地さえしない。

ここは「入れ出し」（入港して、すぐ出港すること）だから、チューブ（煙管）は突かなかつたが、スモークドア（煙室のドア）をあけて、フラン（煤）（すす）おとしだけはやらされる。船が着くと同時

に、フィニッシュ（終了）のテレグラフ（速力伝達器）が鳴ると、スモークドアをぶちあけて、焼けたフランをかきおとすのだ。その暑さ、熱さ、たまったものではない。

ようやく仕事を終わってあがってくると、ひと息つくまもなくまたワッチ（当直）だ。船が動きだすと、すぐアス（石炭の燃えがら）巻きだ。

労働、労働、くるしい労働の連続だ。少々陸で食いつめても、なまじ欧州航路のコロップス（石炭夫）なんかになるものじゃないと、つくづく思う。いくら陸のくるしい労働だって、卒倒するまで酷使はしないだろう。しかし、この航路のこの付近では、作業中に卒倒することを茶飯事と心えているのだ。おれは何回ひっくり返ったなどと、平気で話しているのだ。

四月二五日

いちばん気にしていたレッドシー（紅海）は、向い風で思いのほか涼しい。右はアラビア、左はアフリカ。広漠たる大砂漠にはさまれたこの海は、気味わるいまで濃藍の色をたたえている。空も雲影ひとつなく澄みわたっている。太陽はあいかわらず赫灼と、その光と熱のありったけを海上に放射している。

夜はこのごろ月がなくなった。だが、星がじつに美しい。ワッチのくるしい労働から解放されて、フランと灰と石炭の粉のまぶれついたからだを洗いおとして、デッキ（甲板）にあがって、晴れた空の星辰（せいしん）をながめる気持は、あるいはマドロスならではの味わえない境地かもしれない。だが、そうした感傷にちかい神秘の境地にひたることも、ながくはつづかない。現実のきびしい生活が、それをゆるさない。

はたらかねばならない。朝の七時からまたワッチだ。はたらくためには、休養を要する。睡眠が必

要だ。寝もせず、いつまでも夜空をながめているわけにはいかない。どんなにせまつくろしい、きたない部屋の汗くさいベッドでも、また汗じつくりになって、「くるしい睡眠」を、むりにでもとらねばならない。

きょうは、大部屋の大掃除をやった。

火夫長^{サンベン}は、シンガポールから積んできたパイナップルをアイスチャンパー（冷凍室）で冷やして、みんなに一個ずつ配った。そして、みんなが「ありがとう」とか「ご馳走さま」とかいって礼をいうのを、年がいてもなく悦に入っているのもおかしい。みんなはそのうえ、ますますかれの歡心を買うようなお追従をいうのだ。

この一個の、せいぜい二〇銭そこそのパイナップルが、月々みんながかれのためにしぼられる金の何百分の一にあたっているか。「ありがとう」とか「ご馳走さま」とか、口にだすのもしやくのたねだ。

四月二十七日

きのう正午ごろ、とつぜんブリッジ（船橋）のテレグラフが鳴った。なにごとだろうと外をみると、ゆくてに一隻の船がストップしていた。本船はだんだんその船に近づいていった。その船はフランスのフライキ（信号旗）を揚げた、一万トンほどのメール船（郵便船）であった。

船尾と船首のオーネン（天幕）の下から、多数の黒人のデッキパー（デッキパッセンジャー）デッキで寝起きする船客が、メジロ押しに本船をのぞいていた。船は信号旗を揚げたりおろしたりした。どこか、故障でもしていたのだろう。どんな信号がかわされたのか、本船はゴー・ヘー・フル（全速運転）で進みだした。船舷にもたれた船客たちが、しきりに帽子やハンカチをふっていた。

客船に乗っていると、貨物船のように退屈はしない。乗組員は多いし、男女の船客もみえるし、かわいらしい子どもや赤ん坊の泣き声さえきける。貨物船に乗ってながい航海をつづけていると、めす猫のさかりがついた鳴き声さえ話題となって大さわぎになるが、客船ではそんなことはない。

大きな船になればなるほど、各部の仕事が分化され、じぶんの部以外のことはまったくわからない。現に私たちは、甲・司部（甲板部・司厨部）のことは皆目わからない。どんなお客たちがどれだけ乗っているかも、私たちにはわからない。

四月二九日

二八日午後七時、ポートサイド着。二九日午後二時、出帆。

二七日の夕方、アフリカ大陸とアラビアの砂漠とがのぞめる、せまい海峡へはいっていった。左方は、ごつごつした岩山が長くつづく断崖となつて海におちこんでおり、岸には白く波がくだけているのがみえた。右のアラビア側は、なだらかな起伏をなした砂漠が際限なくつづいていた。

二八日の朝、船はもう、スエズの市街を後方にのぞむ運河のなかにはいつていた。みわたすかぎり広漠たる大砂漠。太陽はこのかっ色の砂漠の反射のためか、一種ちがつた濃黄をおびた光線を、目がくらむようになげつけている。えんえんとして運河は、一条の藍のリボンを引きのびしたようにつづいている。運河の幅は、汽船が一隻通れば、兩岸はいくらもすぎがない。毎日幾十隻と通過するの、波で洗われてか堤防がこわれたところもある。もともとざらざらした土だから、ねばりがないらしい。

船はハーフ（半速運転）で、ときにはスローで進んでいる。ラクダや馬を使って堤防の修理をしているところが、何か所かあった。黒い裸の子どもが、奇声をあげ両手をあげて、船に平行して堤防の

上を走る。左のほう、ずっとかなたにひと叢^{むら}ふた叢、濃緑の熱帯樹のしげみが見える。そこには、小鳥の巣箱のような土人の家が建っている。いわゆるオアシスだ。人を乗せた四〇五匹のラクダが、オアシスのほうへ歩いていくのがみえる。

ワツチからあがってみると、船は広い湖水の上を走っていた。三角帆の小船や小蒸汽が浮いていた。船はまた運河にはいった。両方の堤防が高くて眺望がきかないところがあった。運河の幅が広いところに屋根船を浮かせて、そこから釣糸をたれている人たちもいた。

夕方、船がポートサイドにちかづくころは、堤防は、青草がはえ、樹木がしげり、人の住めそうなところにみえた。堤防と平行して道路があり、自動車走っていた。その道路のむこうは鉄道線路で、おりから走ってきた汽車が本船とすれちがうとき、汽車の乗客と船の乗客とがハンカチや帽子をふりあうという、おもしろい場面をえがいた。

ポートサイドに着くと、すぐチューブ突き（煙管掃除）をやらされる。出帆がはやいためだ。船がアンカー（錨）をおろすかおろさぬうちから、スモークドアをぶちあけてチューブ突きをやる。あがつてくると一一時半。よごれたからだを洗いながすのもそこそこに、ベッドにころげこむ。しばらくうとうとすると、むりにたたき起こされてアス巻きだ。

午前三時。船はもう、ポートサイドの港をはなれていた。

ファネス（火炉）一八本、全部のアスを引きだして小山ほどたまったアスを巻き終わってあがつてくると、五時半。夜はもう明けはなたれて、水平線から真赤な太陽がのぼりかけている。もう眠れもない。そのままデッキの上に横になって、うとうとすると、七時からワツチだ。からだはまったくへとへとにつかれてしまった。目がぴよこんとひっこんだ。